

宇都宮市埋蔵文化財調査報告 第16集

權 現 山 古 墳

—北山古墳群調査報告 I —

昭和 60 年 3 月

宇都宮市教育委員会

序 文

権現山古墳は、宇都宮市が史跡として指定している北山古墳群を構成する前方後円墳の一つです。本市が昭和53年から5ヵ年をかけて実施した遺跡分布調査の結果、市内に所在する古墳は228基確認されております。しかし、行政機関によって積極的に保護されている古墳は栃木県指定の3ヵ所5基、本市指定の2ヵ所9基にすぎない現状にあります。

北山古墳群は、前方後円墳3基と円墳5基が集中する本市を代表する古墳群であり、研究者をはじめとして文化財めぐりなどで多くの人々が訪れております。同古墳群については、宇都宮市史その他の書籍によって紹介されておりますが、各古墳の墳丘の規模や開口している主体部の様子等には詳細な調査は行われないままになっておりました。これは、北山古墳群を管理する当教育委員会が抱える問題の一つであり、解決しなければならない課題でした。

したがって、宇都宮大学考古学研究会から権現山古墳の調査をしたいとの申し入れは、当教育委員会としては有難いことでした。今回の権現山古墳の調査に端を発して、北山古墳群全体に調査の手が加わるよう努力しなければならないと考えております。

権現山古墳の調査は、当教育委員会が主体となり担当者も委員会事務局職員になっておりますが、実際の調査作業は宇都宮大学考古学研究会の諸君の手によって実施されたものであり、本報告書も同研究会に負う所が大きいと言えます。

改めて、宇都宮大学考古学研究会の諸君に謝意を表します。

文末になりましたが、本報告書が同学諸兄の資料として活用されれば幸いです。

昭和60年3月

宇都宮市教育委員会

教育長 後藤一雄

例　　言

- 1 本報告書は、宇都宮市指定史跡「北山古墳群」(宇都宮市瓦谷町・岩本町、市遺跡番号44)内の「権現山古墳」(岩本町464番地)の調査報告である。
- 2 発掘調査(権現山古墳石室)は、昭和59年11月19日から12月8日にかけて宇都宮市教育委員会が主体となり、宇都宮大学考古学研究会によって実施した。
- 3 本報告書の執筆は、「4 権現古墳」を宇都宮大学考古学研究会、他は定岡明義が担当した。なお、編集は定岡がこれにあたった。
- 4 本調査の関係者は次の通りである。

主体者	宇都宮市教育委員会	教　　育　　長	後　藤　一　雄
事務局	〃	社会教育課　課　　長	加　藤　悦　男
〃	〃	〃　文化振興係長	小　林　錦　一
〃(担当者)	〃	〃　〃　指導主事	定　岡　明　義
〃(〃)	〃	〃　〃　主任主事	手　塚　英　男
〃(〃)	〃	〃　〃　〃　梁　木　誠	
〃	〃	〃　〃　〃　阿　部　信　弘	

調査員(宇都宮大学考古学研究会)

河　俣　雅　久	山　崎　弘　貴	長　谷　川　操	増　渕　純　子
大　森　久美子	築　島　佐　知　子	小　山　宏　之	関　根　穂　高
大　藏　雅　之	今　平　利　幸	篠　原　万　里　子	渡　辺　直　子
岩　月　知　子	木　下　真　由　美	津　布　樂　一　樹	鈴　木　香　代　子
古　口　秀　子	園　部　和　枝	渡　辺　晶　子	細　田　佳　苗
山　本　正　仁	山　田　裕　己	桐　原　博　道	吉　田　香
山　本　圭　子	藤　田　主　計		

調査補助員

島　崎　熊　男	堀　田　一　夫	谷　中　一　郎	小　川　栄　司
佐　藤　貞　三	松　本　美　雄		

なお、本調査に際して、久保哲三氏（専修大学教授）小堀時蔵氏（宇都宮市文化財保護審議委員会委員）橋本澄朗氏（栃木県立博物館主任研究員）及び金田信夫氏（聖山公園遺跡調査員）の御協力を賜った、記って感謝の意を表する。

目 次

• 序 文	宇都宮市教育委員会教育長 後 藤 一 雄
• 例 言	
I 調 査 経 過	1
II 遺 跡 環 境	2
III 北 山 古 墳 群	4
1 古 墳 の 分 布	4
2 遺 跡 の 名 称	4
3 保 護 と 活 用	5
IV 権 現 山 古 墳	7
1 墳 丘 に つ い て	7
2 内 部 主 体 に つ い て	7
(1) 玄 室 (2) 羨 道 (3) 前 庭 部 (4) 小 結	
3 ま と め	10
• 註 , 参 考 文 献	13
V 図 版	14

I 調査経過

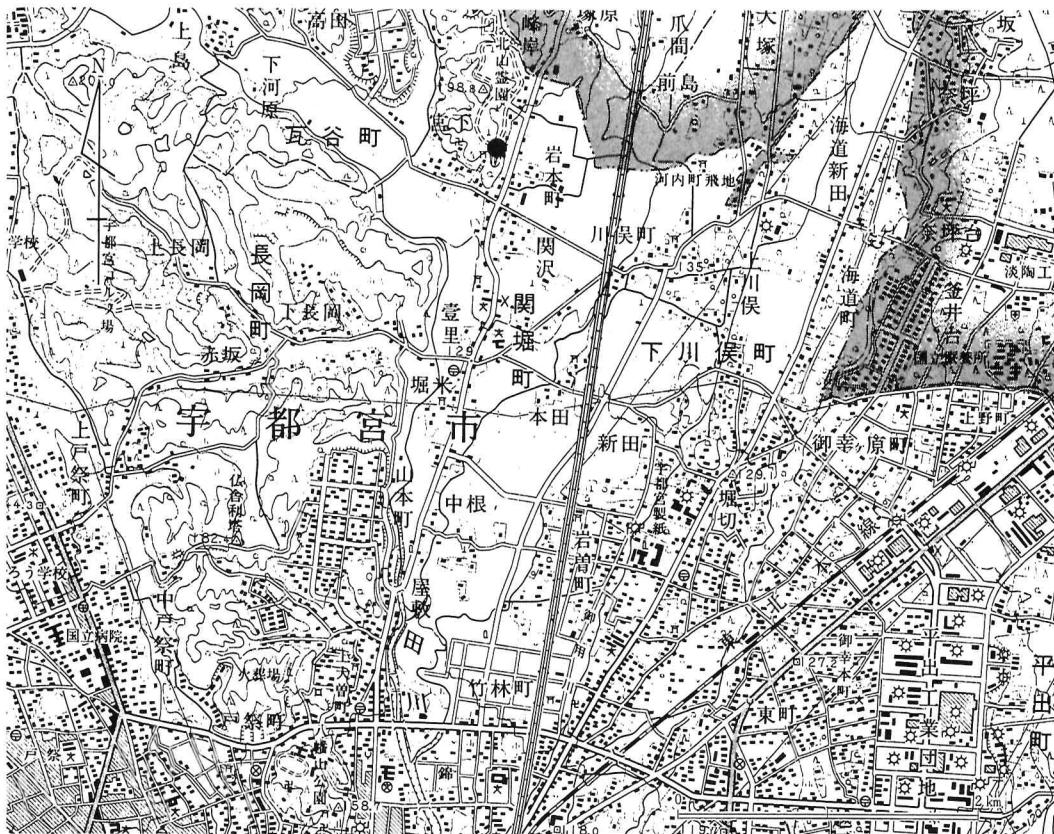
北山古墳群内の3基の前方後円墳(宮下古墳・雷電山古墳・權現山古墳)は、明治32年に発掘されその成果は「東京人類学会雑誌・第158号」に掲載されているが、その全容は明らかとはいえない。

しかし、その後北山古墳群の調査は、大和久震平氏[註①]や小堀時蔵氏[註②]等によって取り上げられただけで本格的には実施されずに今日に至っていた。

このような状況の中で、昭和59年5月、宇都宮大学考古学研究会によって権現山古墳の墳丘実測が行なわれた。ついで、同年11月から12月にかけて権現山古墳の石室調査を実施したい旨、同研究会から宇都宮市教育委員会に申し出があった。

当教育委員会では、発掘主体者を教育長として了解し、事務手続きを進めると共に研究会と協議し、次の3点に重点を置いて調査を実施することとした。

- 石室内部に流入した土砂を取り除き玄室及び羨道の床面を精査する。
- 羨道部の前面(前庭部)を調査する。
- 石室全体を実測する。



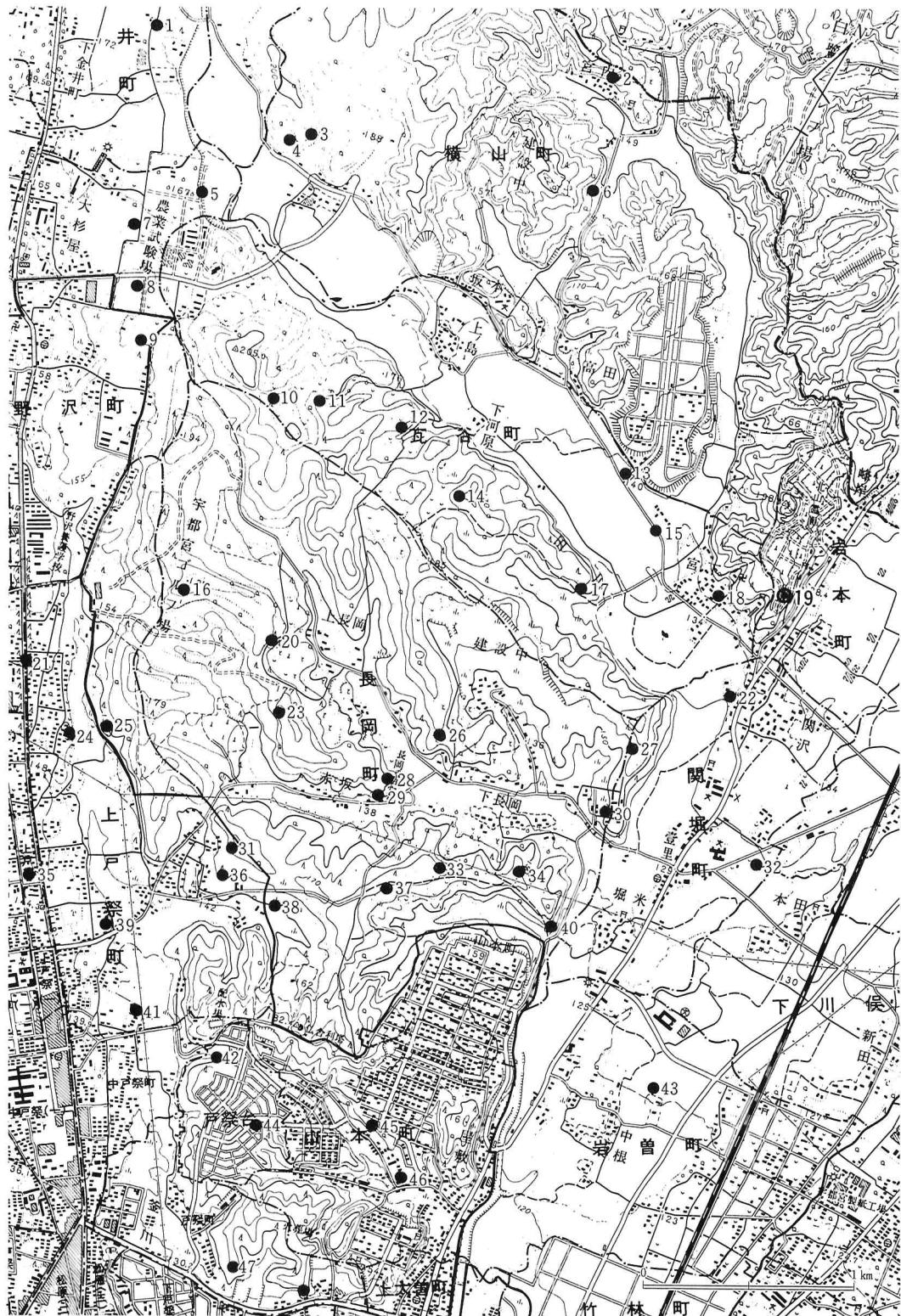
第1図 北山古墳群位置図

II 遺 跡 環 境

権現山古墳を含む北山古墳群は、宇都宮北部河内町と境を接する田川中流左岸の低丘陵端部に立地している。田川河面からの比高差は約30~50 mであり、同古墳群中の3基の前方後円墳はいずれも支状丘陵の尾根に築かれており、最も高い所に位置する宮下古墳の後円部墳頂は標高181.7 mである。なお、権現山古墳の後円部墳頂は164.0 mで、北山古墳群の3基の前方後円墳の中で一番低い地点に築造されている。北山古墳群の東と南には田川と山田川によってつくられた沖積地が広がり水田地帯となり、西側は田川と谷状の沖積地をはさんで西南にのびる低丘陵で、南は宇都宮の市街地縁辺まで伸びている。

この田川対岸の丘陵は、宇都宮市内の遺跡密集地の一つであり、大古墳群である瓦塚古墳群（第2図の26）の他、谷口山古墳群（同30）大ジノ古墳群（同31）山本山古墳群（同44）等の古墳群、さらには県指定史跡の大塚古墳（同36）、横穴墓である長岡百穴（同29）などが分布しており将来、北山古墳群もこれらの古墳との関連で考察される必要があろう。古墳以外の主な遺跡としては、縄文時代の瓦塚日満北久保遺跡（同14）田向遺跡（同40）払面遺跡（同46）、弥生時代の遺跡として宇都宮を代表する野沢遺跡（同17）野沢北遺跡（同5）がある。なお、須恵器の窯跡を含むと推定されている次の上遺跡（同12）と古代瓦の供給窯として著名な水道山瓦窯跡群（同42）もこの丘陵内に位置していることは特記すべき事項といえる。

番号	遺跡名称	市遺跡番号	番号	遺跡名称	市遺跡番号	番号	遺跡名称	市遺跡番号
1	下金井遺跡	28	17	徳次郎城跡	41	33	前坂供養塚群	61
2	宮内坪裏山遺跡	32	18	北の館跡	128	34	姥ヶ入供養塚群	62
3	星の宮神社裏遺跡	35	19	北山古墳群	44	35	妙吉塚	124
4	寺山供養塚群	34	20	道半塚供養塚群	51	36	大塚古墳	57
5	野沢北遺跡	29	21	上戸祭一里塚	47	37	長山供養塚群	60
6	念仏塚遺跡	33	22	閑堀土用地遺跡	45	38	松ヶ丘遺跡	59
7	野沢遺跡	30	23	権現山供養塚群	343	39	三本松遺跡	56
8	野沢石塚遺跡	31	24	高谷林一里塚	49	40	田向遺跡	63
9	野沢向内遺跡	46	25	上戸祭中嶋遺跡	50	41	根河原瓦窯跡	64
10	大久保牛塚	37	26	瓦塚古墳群	54	42	水道山瓦窯跡群	65
11	櫻畠遺跡	38	27	旧閑沢権現南供養塚群	342	43	堀之内遺跡	70
12	欠の上遺跡	39	28	長岡百穴裏遺跡	52	44	山本山古墳群	68
13	曾理部羅遺跡	42	29	長岡百穴	53	45	入畠窯跡	66
14	瓦塚、日満、北久保遺跡	40	30	谷口山古墳群	55	46	払面遺跡	67
15	上の台遺跡	43	31	大ジノ古墳群	58	47	戸祭山兜塚古墳群	344
16	宇都宮ゴルフ場遺跡	48	32	戸用地遺跡	127	48	戸祭兎	71



第2図 北山古墳群周辺遺跡分布図

III 北山古墳群

1 古墳の分布

北山古墳群には、現在、宮下古墳・雷電山古墳・権現山古墳の3基の前方後円墳と宮下古墳の前面にV字型に所在する5基の円墳（宮下円墳群と称することにする）の存在が確認できる。

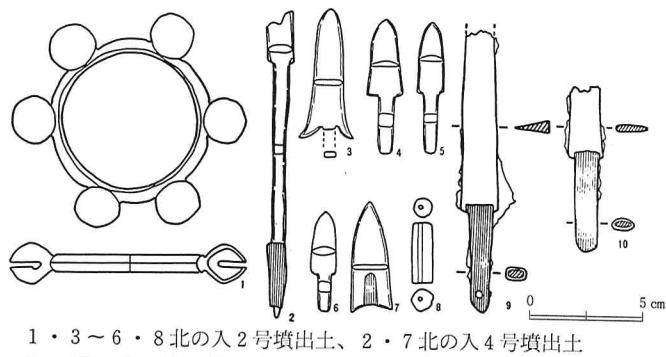
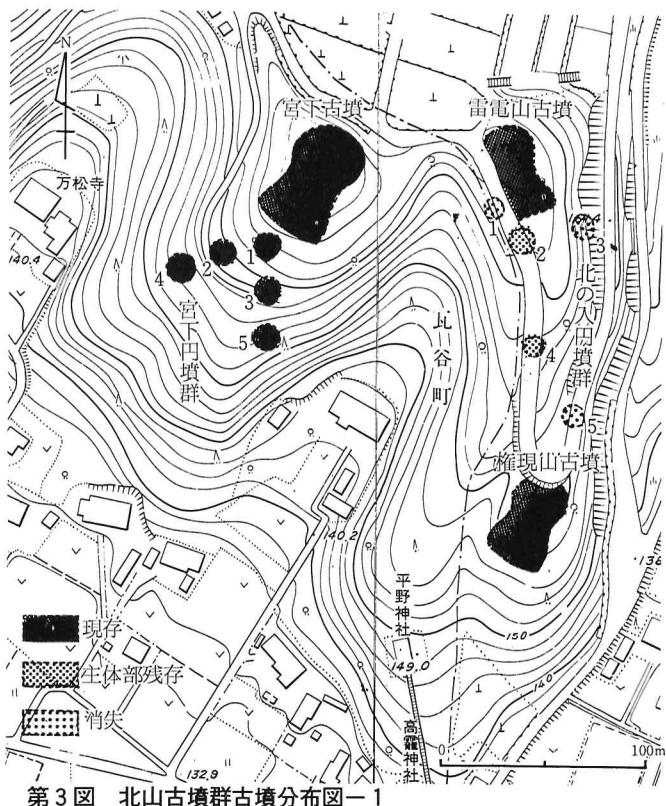
しかし、かつては第3図〔註③〕に示した通り雷電山古墳周辺及び同墳と権現山古墳の間に5基の円墳（北の入円墳群と称することにする）が所在していた。この北の入円墳群は、靈園の造成に伴なう園路工事によつていずれも墳丘を削平されてしまったが、2・4号墳には主体部の一部が園路下に残在しており、3号墳もその所在を立証するかのように鏡石が露出している。

なお、北の入2号・4号墳〔註④〕から、園路工事で石室が露出した際、銅製の鈴鉤・直刀・刀子等が検出されており、その一部が「宇都宮市史第1巻」に掲載されているので第4図に示しておく。

2 遺跡の名称

「北山古墳群」という名称は、宇都宮市教育委員会が昭和53年から便宜上同古墳群に付したものであり、正式の遺跡名称としたのは昭和58年市内の遺跡分布調査を終了し、本市の遺跡台帳に遺跡番号44として登録してからである。

登録以前の北山古墳群は、同一丘陵上に隣接していながら二つの古墳群として取り扱われてきた。



1・3～6・8 北の入2号墳出土、2・7 北の入4号墳出土

第4図 北の入2号・4号墳出土遺物



第5図 北山古墳群古墳分布図－2

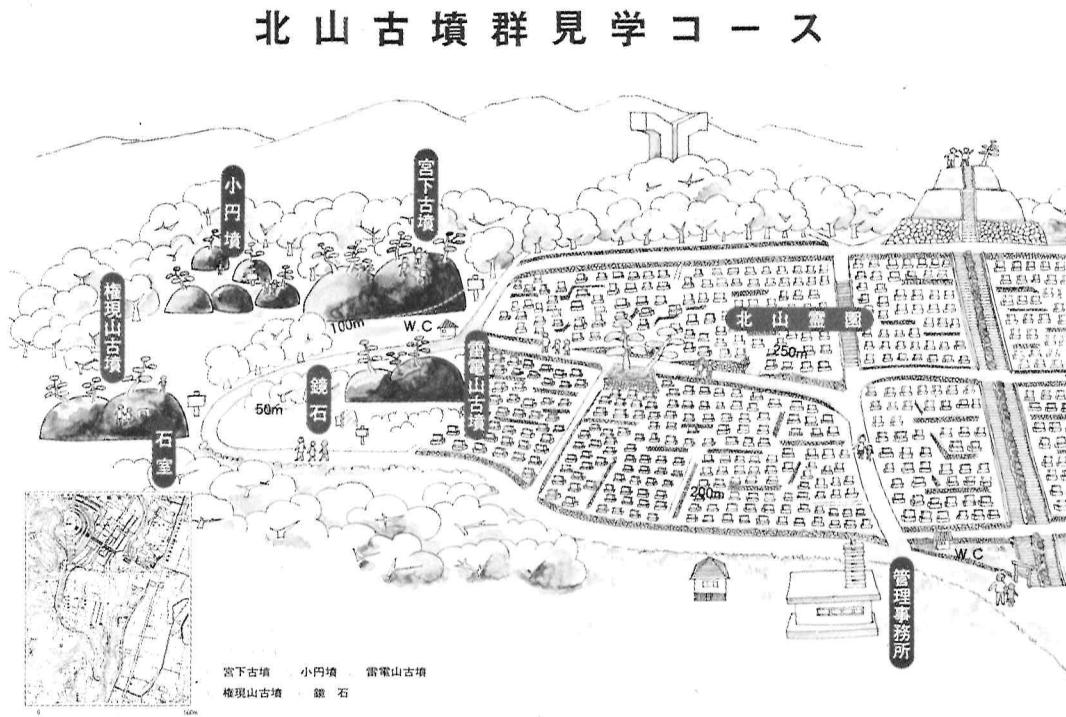
これは、宮下古墳と同墳前面円墳群(宮下古墳群)が瓦谷町字宮下に、雷電山古墳と権現山古墳及び周辺の円墳群(北の入古墳群)が岩本町字北の入に所在したことによるものである。なお、「雷電山古墳」・「権現山古墳」及び両墳周辺の円墳を含めた「北の入古墳群」という名称は、昭和37年全国埋蔵文化財調査の際、調査にあたった小堀時蔵氏等によって付されたものである。

3 保護と活用

北山古墳群の主墳ともいえる前方後円墳宮下古墳は、その堂々たる墳形から昭和37年3月20日に宇都宮市の指定史跡とし現状保存を図ってきた。その後、雷電山・権現山の両前方後円墳も市指定史跡(昭和52年12月12日)とし、北山古墳群全体を保護する体制が確立すると共に、同古墳群の活用が検討された。

北山古墳群は、県内では珍らしく3基の前方後円墳が隣接して現存する遺跡であり、交通の便も良いという好条件が整っている。そこで、宇都宮市教育委員会では北山古墳群に見学コースを設定することとした。

見学コースは、全長約600mとし各古墳に説明板を設置すると共に「北山古墳群見学パンフレット」を作成し、訪れる人の便宜を図った。その結果、一般の見学者の他に小学生の遠足や小・中学生の社会科見学等で生きた教材として活用されており、文化財愛護思想の高揚に役立っている。



第6図 北山古墳群見学パンフレット(裏)

N 権 現 山 古 墳

1 墳丘について

本古墳は、現在、サクラ、スギ、等で覆われている。北側のくびれ部周辺には産業廃棄物が置かれており、後円部北側付近は道路のため若干削られている。前方部には、盗掘あるいは土取りと思われる土坑が若干見られる。しかし、全体として墳丘の保存状態は良好である。墳丘は主軸を N -60° E に置き、南西に面しており、横穴式石室は南東に向けて開口している。

墳丘の規模であるが、本古墳はかなり自然地形を利用して築造されているものと思われ、あまり墳端部が判然としない。しかし、地元の方の話では、かつて前方部で盗掘が行われた際に埴輪が出土し、またつい15年前までは埴輪列が見られたそうである。〔註⑤〕 その位置は前方部の157.00 m の等高線付近に相当し、その付近が前方部の墳端部と推定される。以上のことから、推測を多分に含んでいるものの、本古墳の規模を示してみると、全長約40 m、後円部径約22 m、後円部の高さ約3 m、前方部幅約20 m、前方部の高さは後円部より見かけ上1 m 低い。以上の計測値から、前方部と後円部との比高は約1 m であるが、前方部は後円部径よりも開かない墳形を呈していることが看取される。

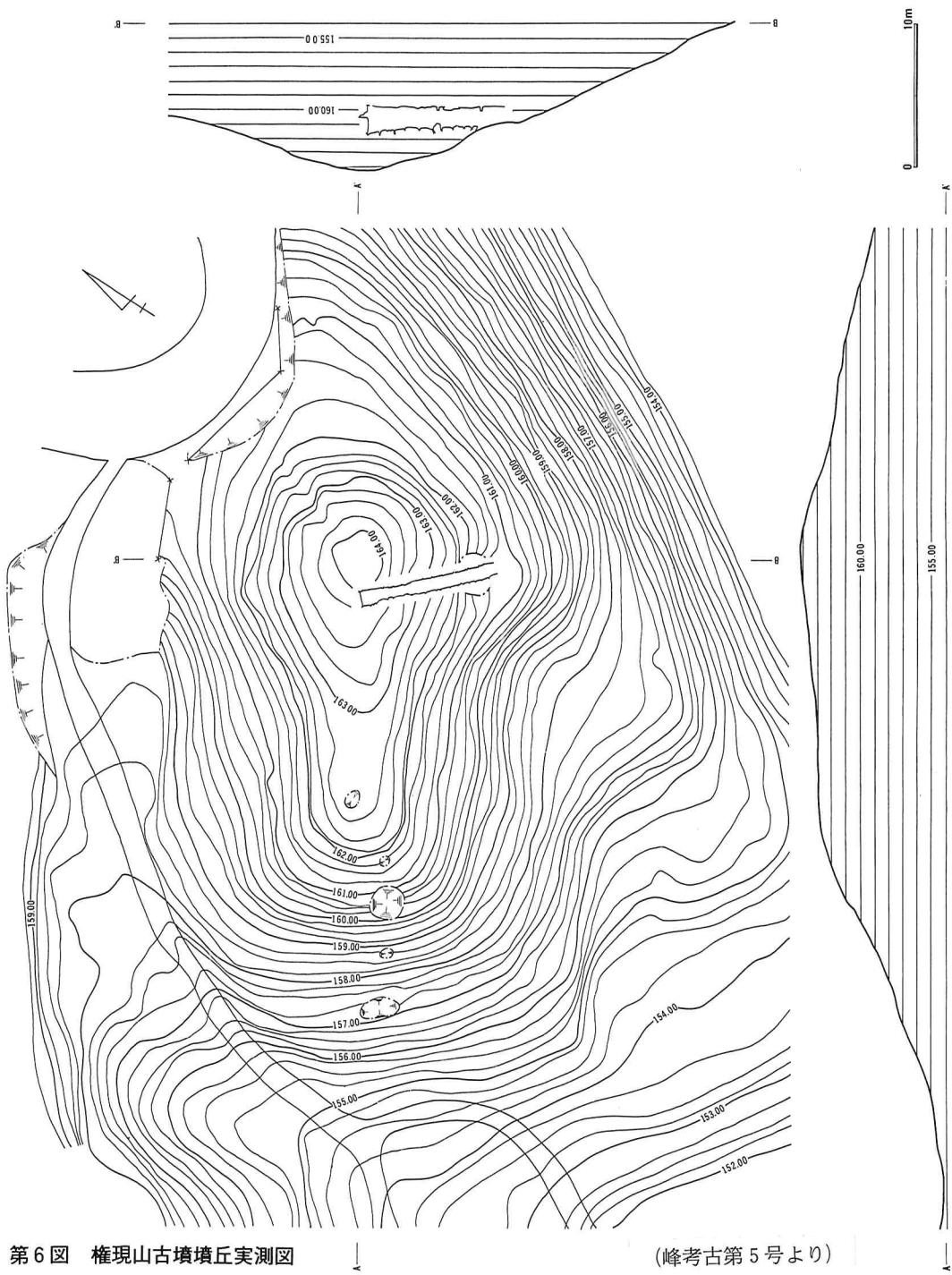
次に、外部施設について触れてみたい。本古墳の周溝に関しては、墳丘の東側から南側にかけて周溝がめぐらされているとは考えにくく、墳丘からそのまま自然地形の斜面へ移行しているものと思われる。墳丘の北側から西側に走る道路に沿った部分には周溝らしい地形が見られるが、これが実際に周溝か、それとも屋根切斷を示すものかどうかははっきりしない。埴輪は、石室実測中に小破片を数点採集した。また前述したように、盗掘の際の状況から推測して、円筒埴輪を主体とした埴輪が墳丘裾部に沿って樹立されていたと思われる。葺石については、前方部側に河原石が若干見られるが、これらが葺石かどうかは現在のところ不明である。

2 内部主体について

内部主体は、主軸方向を N -34° E におく袖無形横穴式石室である。石室は何回かの盗掘を受けており、その際に、前庭部の一部が破壊されている。墳丘の南斜面・石室入口直下には、その時に破壊されたと思われる凝灰岩の破片が散在している。また、玄室内の東側壁が崩れかかっているが、全体としての遺存状態は良好である。

(1) 玄 室

玄室の平面形は、中央付近が内側に若干迫り出しているのが認められて、奥壁から0.80 m の所から内側に曲り始め、玄門から0.85 m の所で再び開く。そこから羨門までは一定の幅をもって続いている。玄室の長さは4.90 m、幅は、奥壁付近の最大幅が1.03 m、玄門側の最大幅が0.92 m、



第6図 権現山古墳墳丘実測図

(峰考古第5号より)

玄門内最小幅は、奥壁から2.15 m の所で0.64 m である。

奥壁は、2枚の凝灰岩質砂岩の大型割石で床面から高さは1.94 m を測る。奥壁の2枚石のうち下部の石は、盗掘の際に掘られたと思われる穴が奥行60 cm 程度まで入っているが、このことから考えると、奥壁に使われた割石はかなりの厚さのものであると思われる。縦断面図を見ると、この

奥壁の向うに従って床面と天井石との間隔は徐々に広がり、奥壁で最大の高さとなる。

側壁は凝灰岩の割石乱石積みである。東側壁は崩れかかっていて遺存状態はあまり良好でないが、西側壁は東側壁に比べてよく残っている。両側壁とも根石に相当する部分がはっきりせず、現状では、小石と土砂の混じり合ったものが露出している。積み方に規則制を見い出すことはできないが、基本的には、割石は横長にして積まれ、上下によく石の目が通る傾向がある。さらに、この隙間は小石によって補填されており、壁体の隙間からは背後に裏込めが施されている状況が窺える。持ち送り率〔註⑥〕は10~20%の間である。

天井石は玄室内で5枚使用されており、長さ1m前後の凝灰質砂岩の大型割石である。

床面は凝灰岩の地山で、凝灰岩の破片や原石が散在しているが、これが敷石か、あるいは側壁が崩落したものかは、何回もの盗掘を受けていたために断定し難い。

玄門は樋石を挟んで2本の方立石を立て、その上に他から0.40m前後下げて天井石がかけ渡され、凝似楣2コの構造を呈する。樋石は最大厚0.15mで床面から0.18mの高さのものである。方立石は東側が地上1.3mの高さで、最大幅が0.70m、西側が地上1.1mの高さで、最大幅が0.60mを測る。

(2) 羨道

羨道の遺存状態は良好である。羨道長は2.8mで幅0.8mの間隔をもって平行に前庭部まで続いている。側壁は床面から1.3mの高さがあり、凝灰岩の割石乱石積みである。床面上に大型の割石が横一列に並べられ、その上に大型の割石と小型の割石をうまく組み合わせて積まれている。川原石も多少隙間を埋めるために使用されている。天井石は4枚が使われている。床面には、玄室と羨道を閉塞していたと思われる凝灰岩の板石が厚さの薄い方を入口に向けて倒れている。最大長1.15m、玄門側幅0.74m、厚さ0.33m、入口側幅0.70m、厚さ0.16mで、平面形はほぼ長方形を呈する。これが扉石となって玄門を封じていたものと思われる。

また羨道内からは、羨門から1m付近に鉄製品2個体が出土している。出土状態は、ほぼ床面直上である。

羨門と玄門を対比すると、樋石の大きさ、設置のされ方は同様であるが、側壁は玄門のように1枚の方立石を両側に置くのではなく、羨道の続きとして多少大型の石を何枚か組み合わせている。また楣石は現存していない。

(3) 前庭部

前述したように前庭部は、盗掘の際に上部が破壊されたと思われ、形態を把握することはできないが、羨門から1mまでは側壁の一部が現存している。その先には地山である凝灰岩の岩盤が続いている。

以上が石室に関してであるが、最後に本横穴式石室の規模をまとめてみると次の通りである。

全長8.05m、玄室長5.05m、玄室幅は奥壁側の最大幅1.25m、玄門側の最下幅0.91m、玄門幅0.88m、羨道長3.00m、羨道幅0.88mを測り、玄室内縦横比〔註⑦〕は3.6となる。

また、今回の実測に関連して、石室内の排土作業を行った際に、小玉1、鉄鎌2が検出された。

(4) 小 結

最後に、今回の石室実測から気づいた点をいくつか上げておく。玄室内の平面形と縦断面形を見ると、奥壁から2.50mまでの区域は、玄室内において、他の区域と区別されていたように思われる。平面形をみた場合に、奥壁から2.15mの所を最小幅として側壁が内側に迫出している。そして奥壁から1mの区域は多少胴張り気味である。それと対応するかのように石室縦断面形をみると、天井石と床面との間隔も奥壁から2.3mくらいの所から徐々に広がり、奥壁で高さが最大になる。このことから考えて、この空間を玄室の中でもさらに遺体を安置した場所と考えられる。また玄室と羨道との側壁に関して多少の違いが認められる。すなわち、羨道ではしっかりした根石を側壁下部に据えているのに対して、玄室では部分的にしか認められることである。これが各部における構築の違いであるか、それとも、後世の崩壊によるものかは言及できない。ただ、玄室で割石の見られない部分は凝灰岩の地山、あるいは裏込めに使用したと思われる土砂と小石の混合したものが出している。

また、羨道上に倒れていた凝灰岩の板石であるが、その形や大きさ倒れた状態からみて、玄室と羨道を閉塞していた扉石だと考えられる。これに比類するものとして隣県の群馬県前二子古墳が見い出せる。ここでは玄門の前面に接して、凝灰岩切石の現状で高さ0.90m、幅0.85m前後、厚さ0.20m前後のものが、これを塞ぐように直立している。^[註⑧] 本石室における板石もこれと同様に構築当時は直立していたものと考えられる。

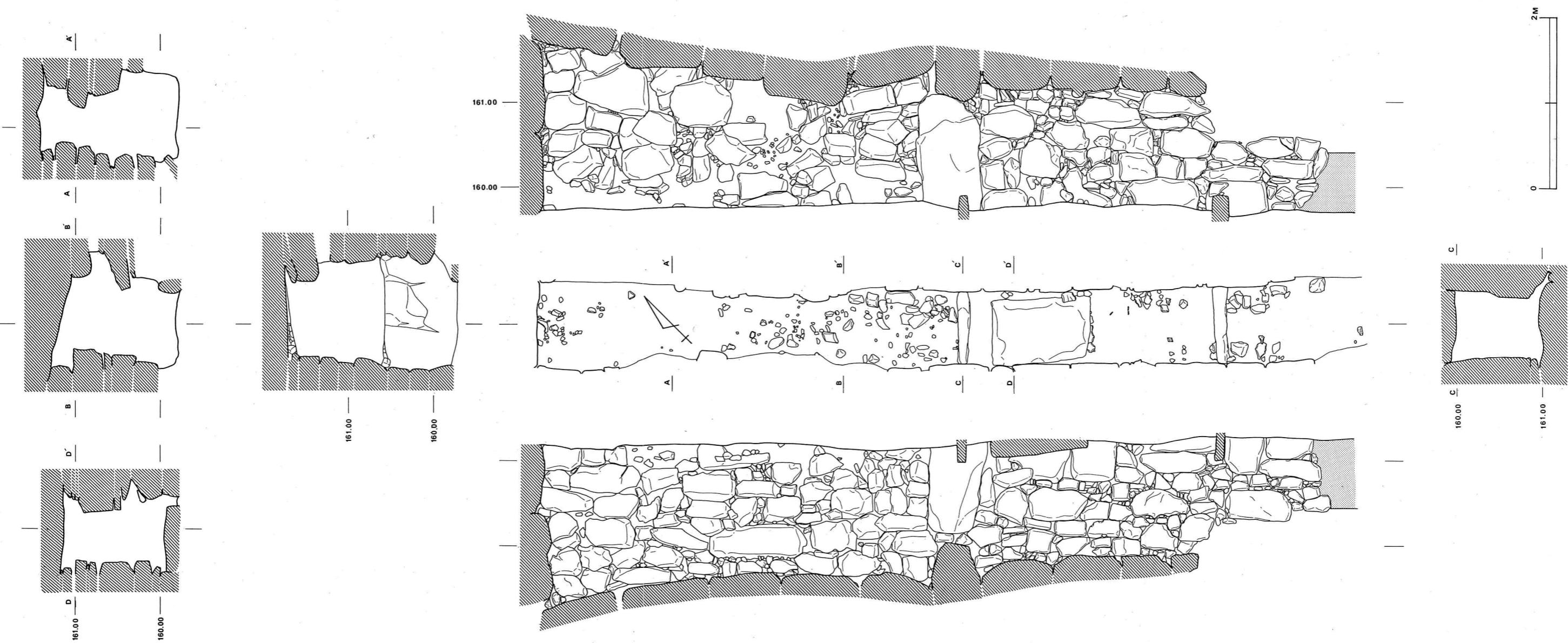
3 ま と め

本墳の所在する丘陵上には宮下古墳以下数基の古墳が有り古墳群を形成しているわけであるが、これらすべてが凝灰岩を主体とする割石積みの横穴式石室である。また、田川を挟んで南側の丘陵上の瓦塚古墳群内にも、やはり凝灰岩割石積みの横穴式石室を採用した古墳が数基認められる。^[註⑨] これらの石室の石材として使われている凝灰岩の産地としては、これら古墳が群がる宇都宮丘陵と大谷石で有名な大谷丘陵がこの付近では代表的に上げられる。凝灰岩は今でも使われているよう、加工しやすいという利点があり、付近にそれを産出するとなれば、石材として使用されたことは当然かもしれない。

本県における横穴式石室の初源として考えられている古墳として大平町中山古墳、同七廻り2号・3号墳が上げられる。^[註⑩] また、隣県である群馬県の前橋市前二子古墳・安中市築瀬二子塚古墳なども、横穴式石室受容期のものと考えられている。^[註⑪] 以上の古墳の石室形態の共通点は、割石乱石積みで、玄室床面の縦横比が4:1となる狭長なもので、羨道も玄室の延長として狭長である。また、多くは袖無型である。このことから考えると、本墳の横穴式石室もこれに類比できると考える。

また、何度も述べているように、数回の盗掘を受けているために時期決定のための良好な遺物が

第7図 植現山古墳石室実測図



ない。

今回の調査は、墳丘測量と石室実測を目的として行ったため、墳丘の規模や石室の形態だけをもってこの古墳の時期を決定することは資料的に無理があるが、以上述べてきたことだけから判断して、本墳を6世紀中葉に置くこととした。また、本県における横穴式石室を持つ前方後円墳としては、初期的なものと考えられる。

以上が北山古墳群現山古墳に関する調査報告である。本稿を草するに際しては筆者の不勉強のためわかりづらいものになってしまったが御了承を願いたい。今回の調査、報告において、専修大学教授久保哲三先生、小堀時蔵先生、定岡明義・梁木誠両氏をはじめとする宇都宮市教育委員会の方々、橋本博文先生、宮崎光明氏には種々の御指導・御教授を頂いた。心より感謝の意を表する次第である。なお、図面作成においては、長谷川操・河俣雅久・関根穂高・津布楽一樹・今平利幸、他当研究会会員があたった。

(文責 関根穂高・今平利幸)

[註]

- ①現山武考古学研究所調査研究室長
- ②現宇都宮市文化財保護審議委員会委員
- ③小堀時蔵氏の指導を得て作図
- ④『宇都宮史』第一巻では、北の入2号墳は権現山1号墳、北の入4号墳は権現山3号墳となっている。
- ⑤かつて前方部南側裾部が盗掘され、同筒埴輪数個と馬形埴輪が出土したという。同筒埴輪墳丘の主軸に直交して5本並び、同筒埴輪の間から馬形埴輪の大部分は失われてしまっているが、その一部が万松寺に保管されている。
- ⑥持送り率は $\frac{\text{床幅}-\text{天井幅}}{\text{床幅}} \times 100$ で計算したもの。
- ⑦縦横比は、玄室最大幅を1と考えた場合。
- ⑧群馬県史編さん委員会『群馬県史』資料3 1981年
- ⑨梁木誠他『針ヶ谷新田古墳群』宇都宮市教育委員会 1983年
- ⑩大和久震平・加藤隆昭・羽生友治『七回り古墳群』大平町教育委員会 1971年
- ⑪註8と同

[参考文献]

- 大和久震平「北之入古墳群」『栃木県史』資料編考古-1976年
- 山ノ井清人「第2章第4節古墳時代」『宇都宮史』第一巻原始・古代編 1979年
- 宇都宮市教育委員会『宇都宮市埋蔵文化財等遺跡詳細分布確認調査報告書・宇都宮の遺跡』1983年
- 梁木誠他『針ヶ谷新田古墳群』宇都宮市教育委員会 1983年

V 図 版



北山古墳群所在丘陵遠景（東から）



同（北から）



宮下古墳全景(北東から)



宮下1・2・3号墳(北から)



雷電山古墳全景（北から）



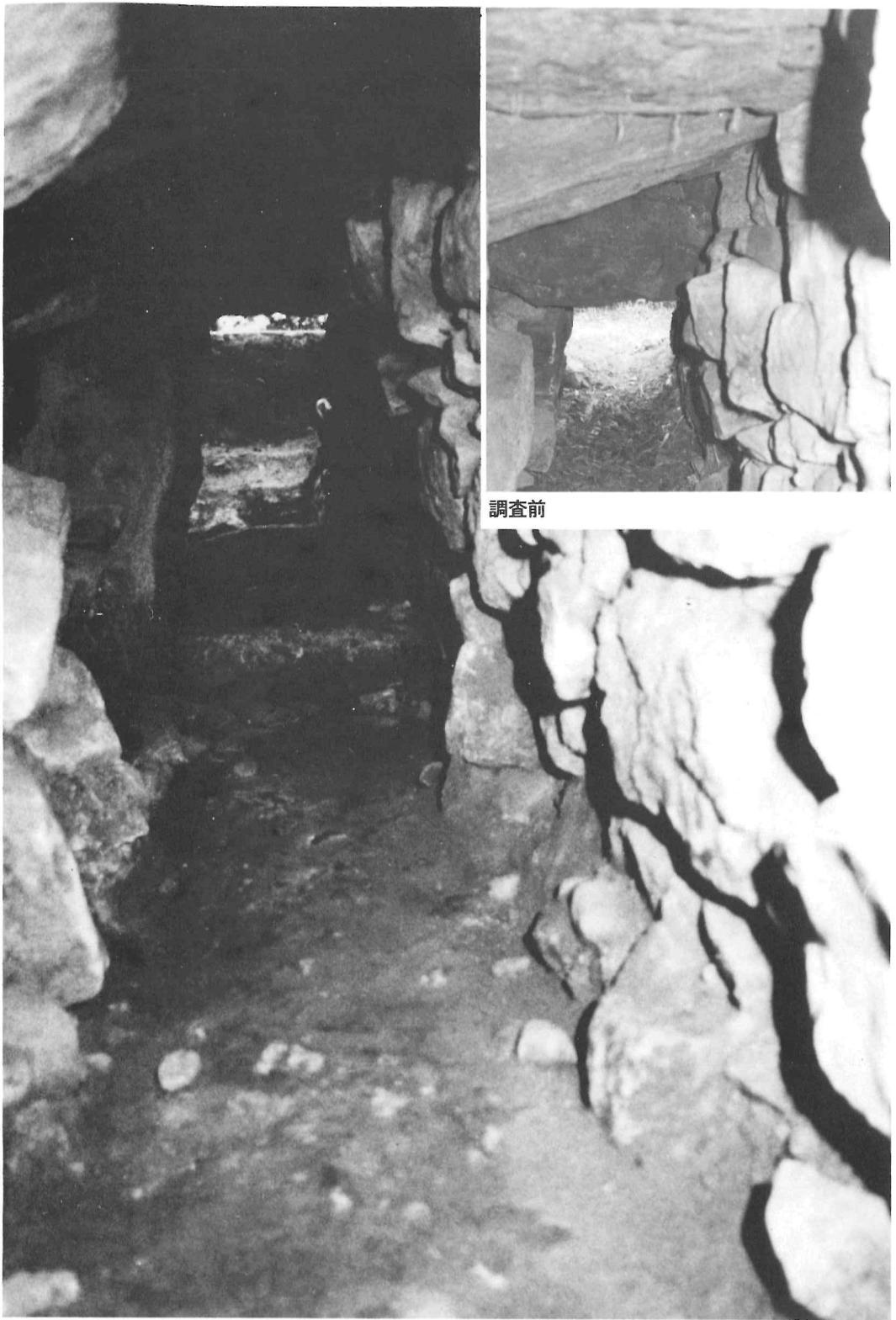
北の入 3号墳鏡石（東から）



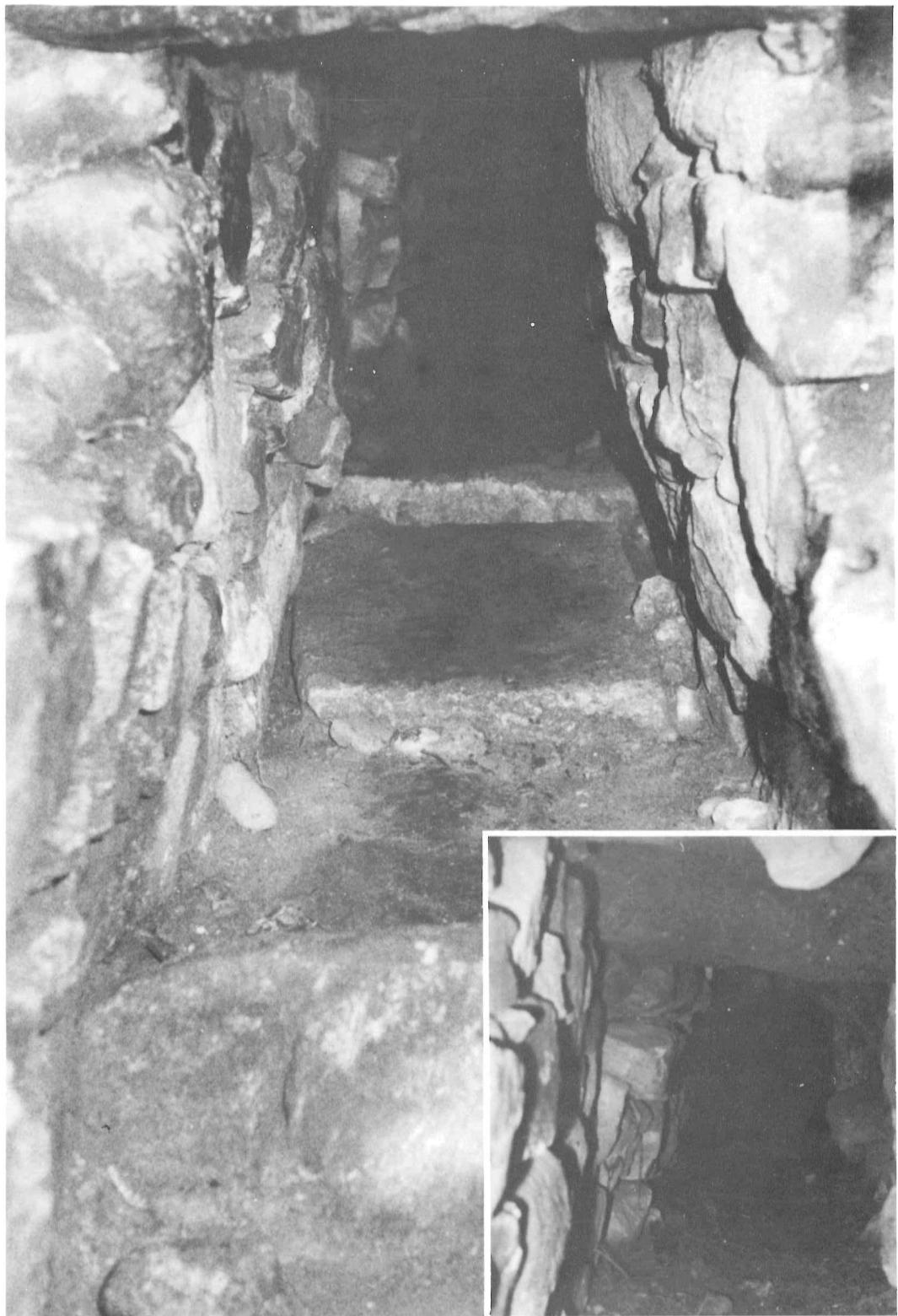
権現山古墳全景（北から）



同（西から）



権現山古墳横穴式石室——羨道1——(中央から)



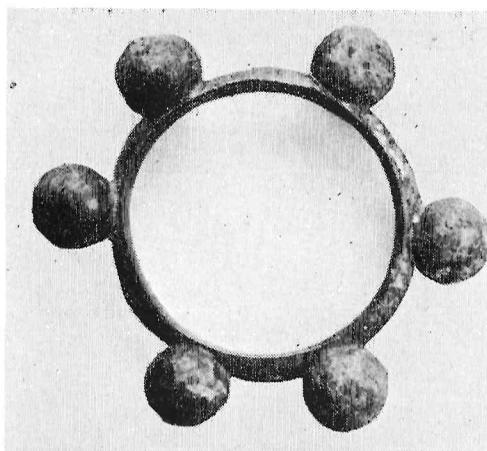
権現山古墳横穴式石室——羨道 2——（中央から） 調査前



権現山古墳横穴式石室——前庭部——



同——奥壁——



鈴鉢（北の入2号墳出土・小堀時藏所蔵）



権現山古墳横穴式石室鐵鏹出土狀況

宇都宮市埋蔵文化財調査報告 第16集

権現山古墳

—北山古墳群調査報告 I —

昭和60年3月 宇都宮市教育委員会 発行

(株) 松井ピ・テ・オ印刷

宇都宮市教育委員会